



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	旅するムスリム : 現代中国における回族のイスラーム実践
Author(s)	奈良, 雅史
Citation	CATS 叢書, 11, 111-116
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66696
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_16.pdf



旅するムスリム

現代中国における回族のイスラーム実践

奈良 雅史

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 准教授

1. フィールドでのささやかな一コマ

「どうもありがとうございました、また来年来ます。もし機会があれば、ぜひ北海道にも遊びに来てください」

「北海道にもモスクはあるんだよね、そのうち北海道にもジャマーアト訪問に行くよ、そのときは現地のムスリムを紹介してね」

2016年9月、私は中国雲南省紅河ハニ族イ族自治州箇旧市における回族集住地域のひとつである沙甸区¹⁾でフィールドワークを行っていた。上記の会話は、沙甸区での調査を終え、帰路につく前に、調査でお世話になった人びとに挨拶をしていた際の一齣、である。新疆出身の40代男性で、現在は沙甸区に住むワン・ヨン²⁾は、観光の意味合いで「日本にも遊びに来て」と言った私に、それを否定することなく、「ジャマーアト訪問に行く」と言い換えた。後述するようにこれはアラビア語の単語に基づく表現であるが、「遊び」や「観光」を意味するものではない。では、これらの言葉はいかに重なり、いかにズレているのか。この言い換えには本稿で取り上げる回族³⁾などのムスリムにとっていかなる意味があるのか。本稿ではこれらの問いを手がかりに、観光が彼らに何を可能としうるのかを考えてみたい。

2. 観光とジャマーアト訪問

漢語における Tourism の訳語は一般に「旅遊 (lǚ yóu)」が用いられる。「旅遊」の一般的な意味は、彭兆栄が観光研究の意義を論じる際に否定的に提示した「社会生活における短期間の娯楽行動」(彭 2004: 4)といえるだろう⁴⁾。この定義に則れば、上記の会話において、私が言わんとしたことは「日本に観光に来て下さい」と言い換えることも可能なものであった。それがワン・ヨンによって「ジャマーアト訪問に行く」と言い換えられたということは、彼にとって日本へ行くことが遊びや上記の意味での観光のみに還元しうるものではなかったためだといえるだろう。では、「ジャマーアト訪問」はどのような意味を持

つのであろうか。

「ジャマーアト⁵⁾ 訪問」⁶⁾は、ムスリムが自身の属するコミュニティの複数のムスリムと共に別のムスリム・コミュニティに行き、イスラームについて学んだり、当地のムスリムと交流したり、宣教したりする活動の意味で使われる。1990年代から上記の沙甸区では、このジャマーアト訪問が活発化し、多くのムスリムが当該地域を訪れるようになった。この活動には、タブリーギー・ジャマーアト⁷⁾という宣教団体がグローバルに展開するイスラーム復興運動との共通性がみられる。この団体による活動の特徴は、イスラーム主義運動のように性急に政教一致を求めず、政治問題から距離を置き、ムスリムの信仰心を高めることを目指すことにある。ジャマーアト訪問においても同様の傾向が見られるため、タブリーギー・ジャマーアトがグローバルに展開するイスラーム復興運動の影響を受けたものだと考えられる(奈良 2015a: 120-123, 136; 2016: 189-193)⁸⁾。

こうした宗教活動としてのジャマーアト訪問と上記の娯楽としての観光は一見すると本質的に異なる活動のように見える。しかし、ワン・ヨンが「遊びに来て下さい」という私の発言を否定することなく、「ジャマーアト訪問に行く」と言い換えたことに示唆されるように、それらは必ずしも矛盾するわけではない。エピソードをひとつ紹介しよう。

2009年2月12日から2月16日までの5日間、私は昆明市で大学に通っていたリ・ハン(20代回族男性)とともに、雲南省でもイスラーム信仰の篤い地域として有名な大理州巍山彝族回族自治县(以下、巍山県と略称)を訪れた。私はリ・ハンに巍山県での回族の友人たちの訪問に誘われ、同行したのだ。そこで行ったことといえば、友人らを訪ね、友人宅に宿泊し、その村のモスクに行き、そこに宗教指導者がいれば彼らと話すというものであった。また、巍山県の旧市街に遊びに行き、城壁などを見学した。そのため、私は単に巍山県に遊びにただけだと思っていた。しかし、リ・ハンは「これはほんとうは「ジャマーアト訪問」なんだけどな。残念なことに雅史(筆者)がムスリムじゃないから、ジャマーアト訪問にならないんだよね。ムスリムひとりだとただの「旅遊」になっちゃうんだよ」とやや残念そうに語った(奈良 2016: 190-191)。

このエピソードからは、ジャマーアト訪問と観光が異なるものと認識されながらも、かなり近い活動として実践されていることが伺える。複数のムスリムで行えば、他地域のムスリム集住地区やモスクを訪問するだけで、特に宣教活動を行わず、娯楽としての観光を行った場合でもジャマーアト訪問とみなされうるのだ。では、こうした観光とジャマーアト訪問の重なりは、回族にとっていかなる意味を持つのだろうか。

3. 観光市場の発展と国家をかわす余地

近年、訪日中国人観光客の「爆買い」が日本において世間の耳目を集めてきたが、中国国内の観光市場も改革・開放政策の導入以降、急激に発展してきた。例えば、2002年には中国人国内旅行者数は約8.78億人に至り、世界最大の国内旅行市場を形成したとされる(韓

2008：167)。また、中国政府も経済成長を促す原動力のひとつとして、積極的に観光業の発展を促進してきた（郭・許 2014）。本稿で取り上げる雲南省は内陸の国境地域に位置し、少数民族が多く居住する貧困地域が多い。そのため、貧困問題の解決と地域振興を目指す中国政府によって、少数民族の生活や文化を資源とする民族観光開発が積極的に行われてきた（曾 2001）。言い換えれば、中国ではより多くの人びとが観光を通して中国国内を移動するようになり、中国政府もそれを促進してきたということである。

しかし、その一方で中国政府は、宗教的領域においては人びとの移動を制限している。例えば、上記のジャマーアト訪問などの宣教活動は中国政府により事実上禁止されている（奈良 2013a：44；2016：114）。中国政府は、宗教活動を政府が公認したモスクなどの宗教施設に限定して管理しており（奈良 2015b：366-371；2016：171-183）、それを逸脱するインフォーマルな宗教活動は厳しく取り締まられる（Nara 2013：54；奈良 2016：147-148, 178）。

こうした中国政府の観光と宗教の位置づけの違いを踏まえると、上述のジャマーアト訪問は観光としては政府に促進される一方で、宗教活動としては禁止されるという意味で、政治的に矛盾をはらんだ実践だといえるだろう。このように矛盾をはらんだ状況は、回族などのムスリムたちに中国政府の宗教に対する管理統制に対して直接的な抵抗をせずにそれを回避しうる可能性を開いている。例えば、ジャマーアト訪問は上述の沙甸区ではその受け入れが事実上黙認されてきたが、その他の多くの地域では政府による取り締まりによりその受け入れが困難な状況にある。しかし、政府による宗教活動への管理統制の厳しい地域のムスリムたちは、沙甸区のように政府による管理統制が比較的緩やかな地域に移動することを通して、日常的に居住する地域では実施困難な活動を政府とのコンフリクトを起こしにくいカタチで実施しうるのである（奈良 2015a；2016：183-202）。

4. 旅するムスリム

しかし、注意しなくてはならないのは、回族などのムスリムが中国政府による管理統制に対処するために観光を装って宗教活動を実践しているわけでは必ずしもないという点だ。上記のエピソードにおいてリ・ハンがイスラームとは関係しない巍山県の旧市街に観光に行ったことにも示唆されるように、そしてワン・ヨンが「遊びに行く」こと自体を否定しなかったように、ジャマーアト訪問のような移動を伴う宗教実践は観光に見せかけた宗教実践なのではなく、観光実践と不可分な宗教実践なのである。

例えば、ジャマーアト訪問と同様の宣教活動として、回族を中心としたムスリム大学生がその担い手となっている「支教（zhijiao）」⁹⁾活動がある。この活動では都市部のムスリム大学生が回族の集住する農村地域に行き、宣教活動や当該地域の児童に対する普通教育の支援を行う。この活動においても一般にイスラームとは関係のない観光がその行程に含まれており、道中の名所名跡を見学し、その土地ならではの食べものを味わう。そして、

こうした娯楽としての観光が、多くの参加者にとって重要な参加動機ともなっている（奈良 2013a：41-42；2016：105-106）。

このように観光が宗教実践と不可分なものとして実践されていることには、回族社会の変容との関係において重要な意味がある。回族はモスクを中心としたコミュニティを伝統的に形成してきた。しかし、改革開放以降、特に都市部では再開発などにより、その社会構造は解体し、回族と漢族の雑居率が増加した。そこで問題となってきたのは、漢族とのつながりが深まったことによって宗教意識が弱体化し、多くの回族がイスラームを実践しなくなってきたとされることだ。しかし、その一方で、改革開放政策導入に伴う宗教政策の緩和により、イスラームに関わる活動は活発化した。そうした状況下、厳格なイスラーム実践を志向する敬虔なムスリムも現れてきた。言い換えれば、改革開放以降の回族社会は二極化の傾向にあるのだ（奈良 2013a；2016：71-78）。

ジャマアト訪問のような観光と宗教が不可分な実践は、回族社会が二極化の傾向にある状況下、宗教性の異なる回族の協働を生み出すものとなっている。より厳格にイスラームを実践する回族は、そうではない回族に対して批判的であり、彼らを主体としたイスラームと関係しない娯楽活動などへの参加を忌避する傾向にある。一方で、礼拝などを行わない回族はモスクでの宗教活動に参加しない傾向にある。そのため、日常生活においてこれらの回族のあいだに接触の機会はそれほど多くない。しかし、上述のように回族の伝統的コミュニティが解体し、より一層漢族を中心とした主流社会に取り込まれていく中で、就業に際しての相互扶助やムスリムの結婚相手探しなどにおいて宗教性の別なく回族間のつながりの重要性が増している（奈良 2013b；Nara 2013）。こうした状況下、ジャマアト訪問のように観光活動でもあり、宗教活動でもある実践は、宗教性の異なる回族がそれぞれに観光活動あるいは宗教活動として意味付けできるため、より多くの回族を巻き込むものとなっている（奈良 2013a；2015a；2016：155-157）。

このように回族は、観光と宗教が不可分な実践を通して、その宗教性の違いから分裂傾向にある回族間のつながりを生み出している。しかし、重要なのは、彼らが抵抗を企図しているわけではないことと同様に、こうした社会的効果を前提に彼らがジャマアト訪問などを実践するわけではないということだ。ジャマアト訪問のような移動を伴う実践は、観光でもあり、宣教でもあるような曖昧さを備えている。だからこそ、回族はそこに宗教的正統性だけではなく娯楽的な楽しみをも見出すことができる。それが多くの回族の参加を可能にし、上記のような効果を生むのだといえる。そうだとすれば、こうした様々な領域がもつれ合うことで生まれる曖昧さのなかに観光の創造性が生起するのかもしれない。

注

- 1) 沙甸区は中国におけるイスラームの中心のひとつであり、雲南省紅河哈尼族彝族自治州箇旧市に位置する。その詳細については拙著を参照（奈良 2015a：114-120；2016：

184-186)。

- 2) 中国において宗教および民族が政治的にデリケートな「問題」であることを考慮し、本稿ではインフォーマントの氏名には仮名を用いる。
- 3) 回族は主に唐代から元代にかけて中国に移住した外来ムスリムとイスラームに改宗した漢人との通婚の繰り返しにより形成された民族集団とされる (奈良 2013a : 34)。
- 4) ただし、2013 年 10 月 1 日に施行された中華人民共和国旅遊法の草案では、その第 2 条において、旅遊は「レジャー、娯楽、遊覧、休暇、親族や友人を訪問すること、病気の治療と保養、買い物、会議への参加、あるいは経済、文化、スポーツ、宗教活動に従事するために、常住する場所を離れ、他の場所へ行き、12 ヶ月を超えない期間を連続で滞在し、その主要な目的が従事する諸活動によって報酬を得る行為ではないものを指す」(中華人民共和国国家旅遊局 2013) とされ、より広い領域を包含するものとして定義された。しかし、実際に施行された中華人民共和国旅遊法では、この定義は削除され、観光の内容に関しては第 2 条で「遊覧、休暇、レジャーなどの観光活動」(中華人民共和国中央人民政府 2013) などと述べるに留まり、その範囲は草案に比べ大きく狭められた。
- 5) 「ジャマーアト」は、アラビア語で「集団」などを意味するジャマーアト (*jama'at*) の音訳であり、中国では一般にモスクを中心に回族が集住するコミュニティ、あるいは単にムスリムの集団を指して使われる。漢語では「哲瑪提 (*zhemati*)」と書かれることが多い (奈良 2015b : 380)。
- 6) 本稿では便宜的に「出哲瑪提 (*chuzhemati*)」の訳語として「ジャマーアト訪問」を用いる (奈良 2015a : 136)。
- 7) タブリーギー・ジャマーアトは、1920 年代、植民地期の北インドで始められ、その宣教活動は今や南アジアだけでなく、東南アジア、北米、アフリカなどグローバルに展開されている (奈良 2015a : 136 ; 2016 : 48)。
- 8) 1990 年代半ば以降、沙甸区にはタイやミャンマーなどの周辺国に暮らす、沙甸区の回族の親族を中心としたムスリムも頻繁に訪れており、ジャマーアト訪問はタブリーギー・ジャマーアトの影響を受けたものであると考えられる (奈良 2015a : 136 ; 2016 : 48)。しかし、中国では外国の宗教集団による活動が制限されており (奈良 2016 : 226)、タブリーギー・ジャマーアトによる活動が行われているとは考えにくい。
- 9) 「支教」に関しては奈良 (2013a ; 2016 : 92-116) を参照。

参考文献 (アルファベット順)

郭為・許珂

- 2014 「旅遊政策、産業發展与就業關係の実証研究」『北京第二外国語学院学報』227 : 7-16。

韓魯安

- 2008 「中国観光産業の課題と持続可能な観光への若干の展望」『人間社会環境研究』15: 165-188.

奈良雅史

- 2013a 「漢化とイスラーム復興のあいだ——中国雲南省における回族大学生の宣教活動の事例から」『宗教と社会』19: 33-47。
- 2013b 「「国家の余白」としての「宗教的なもの」——中国雲南省昆明市における回族の結婚活動を事例として」『史潮』74: 53-72。
- 2015a 「遍在する「周縁」を動く回族——雲南省における地域横断的なイスラーム学習活動の事例から」澤井充生・奈良雅史編『「周縁」を生きる少数民族——現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』, pp.103-143, 勉誠出版。
- 2015b 「動きのなかの自律性——現代中国における回族のインフォーマルな宗教活動の事例から」『文化人類学』80(3): 363-385。
- 2016 『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社。

Nara, Masashi

- 2013 Fragmented yet Associated: *Waqf* Activities in an Urban Hui Muslim Internet Community, *Inter Faculty* 4: 35-58.

彭兆栄

- 2004 『旅遊人類学』民族出版社。

曾士才

- 2001 「中国における民族観光の創出: 貴州省の事例から」『民族学研究』66(3): 87-105。

ウェブサイト

中華人民共和国国家旅遊局

- 2013 『旅遊法（草案）全文』(http://www.cnta.gov.cn/xxfb/jdxwnew2/201506/t20150625_461293.shtml), (参照 2017-01-16)。

中華人民共和国中央人民政府

- 2013 『中華人民共和国旅遊法』(http://www.gov.cn/flfg/2013-04/25/content_2390945.htm), (参照 2017-01-16)。